

新刊紹介

唐代社会文化史研究

那波利貞著

本書は、曾って本学でも教鞭を執られたことのある京都大学名誉教授故那波利貞博士の労作中でも有名なもの六篇を取り上げて一本としたものである。まず、内容を略記すると次のようになる。

第一編 唐の開元末・天宝初期が時世の一変転期たるの考証
(学位請求論文 一九三七年)

第二編 唐鈔本雜抄攷(支那学 一〇、一九四二年)

第三編 梁戸攷(支那仏教史学 二の一・二・四、一九三八年)

第四編 俗講と変文(仏教史学 一の二・三・四、一九五〇年)

第五編 唐代の社邑に就きて(史林 二三の二・三・四、一九三八年)

第六編 仏教信仰に基きて組織せられたる中晚唐五代時代の社邑に就きて(史林 二四の三・四、一九三九年)

第一編は本書の総論としての役割りを有するもので、「歴史とは往昔より現代迄連綿的に不断に継続発展せる人類の集団として、將た国家としての人類生活の大なる綜合的经验なるものであって、その發展に区分などあるべきでない。しかし、その連綿たる不断的的的發展の流の中にも種々の原因による幾つかの段階を

認めることができ、開元末天宝初期において、前後と判然たる區別がつけられる」との意見を出し、以下、そのことを、政治・社会・学芸等々の部門に於ける検討をもつて証拠づけんとしたものである。

第二編以下に於いては、敦煌の地で発見された古書・古記録を縦横に駆使して、或は庶民教育の一端を述べ(第二編)、或は唐代における寺院の特殊権力の存在の提言(第三編)や、仏教と庶民とのかわり合いの一面を論ずるなどのことが為されているのであるが、此れ等を通じて流れているものは、開元末・天宝初期において時世の変革期が存した、という見解である。

さて、博士の所論で注意を要することは、多くの人々が、唐末・五代という時に時代の変革期を設定するのに対し、博士はより早いところの開元末・天宝初期という時点にその変革期を求められたということである。博士が取り上げられた例による限り、博士の見解も妥当なものとして受け容れられよう。しかし、より多くの材料をもつて眺めたばあい、博士の主張をそのまま認められるか、と言うに、その答は、諾 ではなくらう。こうした問題は有るにしても、本書を閲して感じさせられるのは、博士の学殖のただならぬことと、資料の一字一句をもなおざりにしないところの緻密さであつて、そうしたことから中からも色々教えられることが多い。斯学に志す者にとって裨益されることの多い一書と言ふべきこと論をまたないのである。

(昭和四十九年二月 創文社刊 A5版 本文六九一ページ)

(滋野井 恬)